

# 東南アジア研究と、等しく、異なる言語

相沢 伸広

## ●フルートをめぐって

三人の子供がフルートをめぐって話していた。アンナは、「フルートを吹けるのは私だけだから、私が貰うべきだわ」、といった。それに対してボブは、「この中でほかにおもちゃを持っていないのは僕だけなんだ。だから、せめてフルートは僕が手にすべきだ」、とやり返した。最後にカーラは、「このフルートを作ったのは私で、ど

れだけ苦労したことか。だから私が貰うべきなのよ」、と主張した。これは、経済学者アマルティア・センが二〇〇九年に出版した「正義の理念 (The Idea of Justice)」において、複数の「等しく」根拠のある正義の理念が、衝突する局面を表すのに用いた寓話である。フルートが有効に使われることが一番だと考えればアンナを、経済的な平等を大切に考えるならばボ

ブを、労働の対価を受け取る権利を侵してはいけないと考えればカーラを、それぞれ支持するであろう。この世界の様々な正しさの衝突は、こうした「等しく」根拠のある複数の正義同士の対話から始めなければならぬ。センは例え話を用いてこのように議論を喚起する。さて、この例えをもう少しだけ現実により近い形で考えてみたい。

もしも、この三人の子供たちが、異なる言語を話していたとしたら？ 相手が「等しく」正しい考え方をもっていることを、理解する言葉がなかったとしたら？ 三人の子供は、他の正しさに耳を傾けることなく、実力行使にできるかもしれない。

地域研究をしていると、異なる言語世界に特有の、異なる理念の衝突や齟齬に絶えず直面する。そ

の度に研究者は、私がインドネシアの大統領だったら、タイの学生活動家であったならば、マレー半島の漁民であったら、と研究する人々の思考を歴史、政治、社会、あらゆる知見を集めて想像する。研究者が探し求める彼らの思考、理念は、最終的には言語に束縛されている面が強く、その為、我々が地域を研究する過程で、学習の中心には常に言語があった。新たに学ぶ現地語に、他の言語にはない「等しく」説得力のある理念を見出し、センの寓話のような相互に論争可能な局面にまで、引き上げ、突き合わせることは、地域研究者に課された重要な仕事であろう。

## ●言語に宿る歴史

私は、京都大学アジアアフリカ地域研究研究科という、地域研究をその名に冠した大学院でトレ

ニングを受けた。大学院には言語習得のコースがあり、言語を覚えるためにも、現地調査に赴き、現地語で書かれた一次資料を分析して新しい発見を求めた。東南アジア研究を世界的にリードしてきた、米国のコーネル大学やエール大学でも、言語を重視する伝統は日本と同じであった。一九五〇年代、米国の東南アジア地域戦略に資する人材をとく名目で研究、教育資金を受けることになった米国の両大学において、地域戦略に資する人材とは、何よりも東南アジアの現地語を理解し、英語で説明してくれる人材であった。学問の専門化傾向の影響も手伝って、九〇年代以降米国の地域研究は低迷し、二〇〇八年の経済危機がアメリカの各大学を襲い、地域研究に対する二重の予算削減圧力が近年かかった。それでも、両大学とも地域研究プログラムにおける言語教育にかかる予算だけは、頑なに削りなかつた。このことは現在に至るまで、言語の習得こそが地域研究プログラムにおける中核であるという認識を、なによりも顕していた。

強調すべき点は、地域研究における言語の習得とは、流暢に話す

こととは異なる課題を重視している点である。その課題とは、言語を通じてそこに宿された歴史や文化、社会的な背景を概念として理解することを意味していた。その為、言語を学ぶには、現地に滞在するだけでは足りず、体系的な学習が必要な営みであり、ゆえに大学院教育が重視されたのである。

そのようなレベルを早くに達成できなかつた私のようなできの悪い大学院生は、現地で演劇などを観ていても、気の利いた風刺や皮肉で会場中が沸いている時に、一人だけその笑いから取り残された。「抑揚のないジャワ語なまりのインドネシア語のスピーチスハルト大統領」といったことがわからなければ、スハルトと売春婦が下ネタで丁々発止にやり合う様を模して、政権批判を展開していることなど、合点がいくはずもなかつたのである。

言葉の苦勞といえば、東南アジアの特色として主要言語が大きく分かれているという点にも触れておかなければならない。人口でみた時の東南アジアの主要三言語をみてみると、インドネシア語、ベトナム語、タイ語があげられる。構造も文字も随分異なるこれら三

言語を一人でカバーすることのできる研究者は皆無であった。ラテンアメリカにおけるスペイン語、アフリカにおける英語やフランス語にあたる地域内の準普遍語が、東南アジアにはなかつたのである。

### ●東南アジアにおける「英語の世紀」

東南アジア地域研究は、現在は低迷しているとはいえ、米国において一九五〇年代から九〇年代初頭にかけて、東南アジアが一つの地域として戦略的な意味を付与された時代に、大きく発展した。日本語での東南アジア研究もこの間大きく進展し、アジア経済研究所や京都大学東南アジア研究所を中心として多数の書籍が出版された。ただ、量としては英語での出版が圧倒的であり、その蓄積が日本を含め世界中の次の世代の東南アジア研究者の大きな礎となった。かくして、現在、東南アジア研究を行うということは、現地語を学ぶだけでなく、英語を読むことも当然視されている。

英語が東南アジア研究の流通言語としての地位を確立しつつあることのインパクトは、なによりも現地研究者の英語発信力の伸びに

表れている。シンガポール、マレーシアは英国の旧植民地であり、フィリピンは米国の植民地下にあった経緯から、もともと英語で執筆する事のできる研究者は多かった。そこに、一九六〇年代以降、米国に留学した東南アジアの研究者らが増え、彼らは次々と英語で本を書き、論文を発表した。そして今、その世代の子供たち、つまり親の留学や影響等で、米国や英国、オーストラリアで教育を受けた次世代、次々世代が増え、東南アジアの研究者コミュニティに流通する英語の量は、半世紀をかけて飛躍的に増えつつある。

東南アジア研究における「英語の世紀」は、こうして日本で論じられるより早くから始まっていた。現在ではブログをはじめとする電子メディアの拡大により、現地語のみならず、英語で収集できる情報量は飛躍的に増加している。二〇一〇年五月のバンコクの争乱の際には、英語ブログや英語メーリングリストが、タイ語では流通できない情報も含めてリアルタイムで世界に向けて情報を発信し続けた。東南アジアにおける英語での情報流通の拡大は、いまや調査言語としても英語が欠かせな

いことを示している。

### ●何語で書くのが、なにについて書くのか

東南アジア地域研究の中核に現地語理解の重要性がある以上、英語の世紀においても、調べる言語としての現地語の重要性が変わることはしばらくないだろう。いま、地域研究者にとって悩み深い問題は、何語で書くべきなのかという点である。

東南アジアにおける英語の浸透は、何よりも英語での執筆がますます効果的になることを意味する。自然科学、社会科学を問わず、学術的貢献はその時代の普遍語でなされるのが、当然視されてきた。この点は地域研究とて同じであり、広く読者を求める活動の場を広げようと思うならば、人文学特有の困難があっても、やはり英語で書くほかにない。また、東南アジア研究の中核を今後担っていくのは、なによりも世界中の東南アジア出身の研究者であろう。英語で書くということは、その東南アジアの人に読んでもらえるようになる事を意味する。

このことは、複数の主要現地語がある東南アジアだからこそ、さ

らに効果は大きい。東南アジアの事実上の経済的統合が進む過程で隣国への関心が高まり、また、国単位ではない国境を超える地域単位の研究テーマがますます重要視されるようになると、そのテーマに取り組む研究者は複数の国にまたがって読者を求める必要が高まる。その時に有効な執筆言語は、現在英語しかないのである。

ただ、英語で書かなければならないという課題を引き受けながらも、東南アジア地域研究者が悩むのは、普遍語による学術貢献とは異なる極めて重要な知的貢献があることを、多くの人が承知しているからであろう。その側面を、日本語で書くことの意義を通じて確認しておきたい。

東南アジアについて、日本語で書くことの意義は少なくとも二つある。第一の意義は、日本自身が東南アジアのメインプレーヤーのひとりであるという歴史、地政学的な条件に由来する。例えば、東南アジアの経済発展は一九八五年のプラザ合意以降の日系企業の東南アジア進出を抜きには理解できない。チェンマイ・イニシアティブから、東アジア共同体構想を巡る政治過程を理解する為に、日

本が呈示してきた理念の理解は外せない。東南アジアと日本社会の関係の近さゆえに、東南アジアの知見を共有すべき当事者たる読者が日本にはある。読者が当事者であるがゆえに、要求される内容水準も高まり、ゆえに日本語で執筆する意義を高め、さらには研究の発展を支えてくれるのである。

第二の意義として、日本語での執筆を通じて、地域研究のテーマ選択における異なる言語コミュニティ間の比較ができるという利点がある。ごく単純化した例を挙げたい。日本の東南アジア研究においては、経済に関心の中心があるが、米国では政治、安全保障に関心の中心となつている。そのため、日本では経済的統合の産業構造への影響等を問うことに関心が集まり、他方米国ではイスラムと民主主義の親和性や、イスラムとテロの関係に自然と関心が集まる。このようなテーマ選択の違いや癖というのは、現地語そのものに内在するのではなく、執筆言語の研究コミュニティの歴史とその研究コミュニティと東南アジアとの政治経済的な関わり方の違いに因る。したがって、英語と現地語以外に執筆可能な言語を有していること

は、英語の研究コミュニティで注目されるテーマ選択を相対化することができ、常に批判的な検証を行う素地を育む。

地域研究については、長年、専門化されたディシプリンとの間で、方法論を巡る論争が続けられてきた。そこでの論争は主として「どのようにして」分析するのかを巡る議論であった。現在我々に投げかけられている、どの言語で表現するのかわという問いは、それに対して、「なにについて」分析するのかを巡る論争に繋がる。複数の言語コミュニティに属している者は「なにについて」分析するか、言語ごとの複数の選択基準を意識するがゆえに、自ずと一段階追加検討を迫られるかもしれない。

ただ、多くの先達が示してきたくれたように、現地語に通じ、かつ日本語と英語の、二つの執筆言語を持つ日本人の東南アジア地域研究者は、英語の世紀において、特別な位置にあるといえる。一人の研究者が、イスラムと政治の関係については英語で執筆し、経済統合の話は日本語でと読者の多い言語でそれぞれ執筆するというように、執筆言語に応じた効果的な研究発表方法の選択も、研究の重

要性を測る言語での複数の尺度の比較を通じて可能となる。その意義は英語での情報流通が拡大する程ますます大きく思われる。英語以外の執筆言語をもつことは、英語で書く上でも、英語の研究コミュニティを相対化することを可能にし、さらには東南アジアのよう多くの言葉に分化した地域を英語という単一言語で表す時に生じる歪みに、気付き易くさせてくれるであろう。

センが用いた三人の子供の寓話において、ボブとカーラは英語を話しているが、アンナだけが日本語で話をしていたとしたらどうだろうか？ アンナは、ボブとカーラに、なんとか自分の主張を訴える為に英語で話すだろう。その点、アンナは人一倍苦労しなければならぬ。そうになると、この世の中には三つの「等しく」異なる正しさが存在していることを誰が最も理解し、説明しうる可能性を持っているだろうか。その時、地域研究者として、普遍語ではない言葉を複数持つ者の強みが発揮されると、悩みつつも、望みたい。

(あいざわ のぶひろ／在イサカ海外派遣員)